

議員活動

ソフト・エネルギー

～風力エネルギーの現実化を～

元々が東工大出身の技術屋だからというわけでもないが、新技術の開発とその受け皿となる政治的なシステムには、つねに興味を持っている。なかでもポスト石油のバイオニアである原子力発電が廃棄物処理など大きな壁につきあたった中で、代替エネとしてのソフト・エネルギーの将来には、興味以上の意識を持ち続けなければならないと考えている。

ソフトエネの旗手であるエイモリー・ロビンズが来日して日本でもこの行き方が脚光を浴びたころ、私はアメリカを訪れ風力発電所などを見学する旅を続けていた。風から電気エネルギーをとり出すのは単純な原理だが、実用化するとコスト上のさまざまな難問がある。これを風力発電先進地帯のアメリカがどのように解消しているかを探りに出か

けたわけだ。技術的な差はほとんどなく、日米両国の差はソフトエネを育てるかどうかの精神と政治の違いだった。たとえばアメリカでは風力発電機はほとんどが個人の家におかれ、発電した電気の不要分を公共の電線に戻せばその家の電気料金が安くなる、などの制度がとり入れられていた。日本の役人が見ればこの卓抜した発想には舌を巻くばかりだろう。

それから約一年後、委員会がこの問題を取り上げたが、科学技術庁の原子力優先のかなりきな姿勢には、あらためておどろかされた。私は原子力利用を全面的に否定するものではないが、その研究と並行にソフトエネについても相当の予算を投じて研究を進めるべきで、二つの方向を探る中で安全でより優れたものを使えばよいと考えている。